



## お金の重み

京都府・京都市立嵯峨中学校 3年 小林 尚子

祖母は儉約家だ。野菜も捨てるところがないぐらい使い、足が悪くても決してタクシーは使わない。「どうして、そこまで節約するの？」と聞くと、「お金っていうのはすぐに出ていくけど、なかなか戻ってこないからよ」と言った。

ある日、大学生の兄から「奨学金の申請が間に合わなかった」と切羽詰まった様子で電話がかかってきた。兄は寮生活をしており、奨学金を生活費に充てていた。母は「今更仕方がないでしょ。なんとかするから」と兄に答えていたが、溜息をついていた。後日、祖母の家に遊びに行ったとき、「ほんとにもう」と兄に対する愚痴を母がこぼしていた。その時に祖母は黙って聞いていたが、自宅に帰ってから、「お兄ちゃんに連絡するように言って」と祖母から電話があった。その時は、何の要件なのか知らなかった。しばらくすると、突然兄が帰ってきた。そして母と一緒に祖母の家に行き、何度も「ありがとう」や「頑張ります」と言っていた。小学生だった私には、何とも不思議な光景だった。実は、奨学金に代わる生活費を貸してあげるという話で、最初は母も兄も固辞していたが、祖母に押され、最終的には借りることになったそうだ。

その話を後から知った私は、納得できないところがあった。祖母は儉約家で、常々お金の大切さを説いており、この先の老後のために1円の無駄遣いもできないと言っていた。それにも関わらず、卒業も就職も未定な学生の兄にお金を貸したのだ。可愛がっている孫であるといっても、そんなにあっさりお金を出せるものなのか。確かに無駄なお金ではないだろう。でもそのお金があれば、祖母はもう少し楽ができたのではないだろうか。足が悪いので、寝起きが快適になるように電動ベッドなども買えたかもしれない。そこで「本当はおばあちゃんのお家ってすごいお金持ちなの？」と母に聞いてみた。すると母は笑いながら「どうしたの」と聞くので、「お兄ちゃんに簡単に貸せるぐらいならお金が余ってるのかなと思って」と答えた。母は、「余っているのではなく、お兄ちゃんだ

から貸してくれたのよ。お母さんには半分だって貸してくれないわ」と言っていた。訳が分からず、聞き返しても母は笑うだけで、何も答えてくれなかった。思い切って、祖母にも聞いてみると、同じように「お兄ちゃんだからよ」と答えた。「なんで」とさらに聞くと、祖母は「孫は可愛いけれど、可愛いから貸した訳ではなく、貸すに値する人だから」と言った。「でも、本当にお兄ちゃんが返せるのかなあ」と聞くと、「未来の可能性への投資なのよ」と答えた。その時はよく理解できないまま聞いていた。しかし、改めて考えると、使う人の気持ちによって「お金の重み」は全く違うということだと思う。貨幣価値は同じだが、何かを買った時、同じ金額を出していても安く買ったと思うのか、高い買い物をしたと思うのかではお金の重みは全く異なってくる。それは、支払った金額に対してどのくらい価値があったのかによるのだと思う。今回の話は、何かを買ったり、形として何かが残っている訳ではないが祖母にとっては兄という存在は非常に価値があり、それは未来まで続くお金の使い方だったと思う。

日々、儉約している祖母が躊躇なく兄にお金を貸した意味が今なら理解できる。祖母が言っていたように、お金は使えばなくなってしまう。また、ものとして残ってもいずれ捨ててしまい形もなくなってしまうのがほとんどだ。お金を使うということは、本当に価値のあるものなのか見極めることが必要だ。自分にとって本当に必要なことに使うお金は未来へと続く「活きたお金」だと思う。祖母は、形として何も残っていないが、「活きたお金」としては最高の使い方、理想の未来を手に入れたのだから。

今、兄は希望の会社に就職をし、東京に住んでいるが、休暇の度に帰省し、祖母たちに会いに来る。全額返済には時間がかかるが、「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えるのを忘れてはいない。それが祖母の言う、「貸すに値する人」なのだろう。

